View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyoto University Research Information Repository
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository
KYOTO UNIVERSITY

Title	ロシア語における再帰動詞の意義構造について
Author(s)	山口, 巌
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巌教授停年記念論文集 (1998): 388-397
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65812
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

ロシア語における再帰動詞の意義構造について[1]

序　言

ロシア語の再帰動詞は、動詞の末尾に -ся(сь) を付すことによって成る。この形態素は、歴史的には再帰代名詞対格の前倚辞の形である (場合によっては与格形の前倚辞 си に来由するものも、少数ながらみとめられる)。

古代スラヴ語あるいは古代ロシア語においては、現代チェコ語 se、現代ポーランド語 się にみられるように、この形態素は未だ遊離して用いられていた。これが動詞と融合するに至るのは比較的後代のことに属するが、このような融合には、それに先立つ意義的な融合の過程が想定されなくてはならない。しかしその融合の仕方あるいは程度が動詞によって必ずしも一様ではないことも、この種の動詞の意義が極めて多岐にわたることから、既に明らかである。

他方この形態素が、本来自動詞であるべき原基にも附加されうることは、この形態素の附加という手続そのものの意味乃至機能にも、一定の変化が生じていることを、推測せしめるものということができよう。

この小論は、以上のような考えに立って、いわゆる ся 動詞の意味構造を一般的に考察することを、その趣旨とするものである。

I. 再帰の意義

§1　序言において述べたように、形態素 ся は本来再帰代名詞の対格形であった。従って ся 動詞の最も基本的な意義は、他動詞の表示する行為を構成する副次的な対象が、主語としてあらわされる主要な対象 (若しくは変化の担い手) と同一であることを、示すところにあると考えられる。たとえば、

1) Стал *одеваться*, француз камердинер подал ему башмаки с красными каблуками, голубые бархатные штаны, розовый кафтан.　(Пушк.)
「彼は着物を着はじめた。フランス人のボーイは赤いかかとの靴、空色のビロードのズボン、バラ色のカフタンを彼にもって來た。」

2) *Воображаясь* героиней
Своих возлюбленных творцов,
Кларисой, Юлией, Дельфиной,
Татьяна, в тишне лесов

[1] 『人文』 第30集　昭和59(1984)年3月　99–113頁。

Одна с опасной книгой ходит. (Пушик.)
「自分の好きな作家達の女主人公、クラリスやユリヤやデルフィナに、自分がなったように思いえがいて、タチヤナは森のしじまの中を、危険な書物をたずさえ、ただ一人歩きまわる。」

3) В русской орофографии сама матушка не была сильна ...и знала это ...и не хотела *компрометироваться* ... (Тург.)
「ロシア語の正書法には、母親自身強くなかった。.....そして彼女はこのことを知っていた。.....それで彼女は自分の評判を落したくなかった。」

4) Чтобы создать такие линзы, врачу нужна была не только техника. Для этого надо и "*отожествиться*" с больным, почувствовать его состоыание. (Известия)
「そのようなレンズを作るために医者に必要なのは技術だけではない。このためには患者の身になって、彼の病状を感じなければならない。」

ここで 1) の одеваться は「自分に着せる」、2) の воображаться は「自分を～であると想像する」、3) の компрометироваться は「自分の評判を落す」であり、また 4) の отожествиться は「自分を同一化する」の意味である。

§2　上述したような、未だ ся 本来の意義を保存している場合に対して、再帰動詞が主要な対象としての主語自身ではなく、その一部分を副次的な変化の担い手としてあらわす場合が、数において極めて多い。たとえば понуриться = понурить голову 「頭を垂れる」、насупиться = насупить бровь 「眉をしかめる」、жимуриться = жимурить глаза 「眼を細める」、уставиться = уставить глаза 「見つめる」、насторожиться = насторожить уши 「耳をそばだてる」等である。

これは明らかに本来の再帰の意義の弱化である。しかしながらこのような意義の弱化は、前節のような場合にも、すでに存在していたと考えられる。再帰代名詞の対格形が独立して用いられる場合との相違は、まさにこの意義の弱化に求められるべきだと思われるからである。たとえば、

5) Постепенно она уверила *себя*, что беда должна пройзойти с сыном. (К. Федин)
「彼女は次第に息子に悪いことが起るに違いないと自分に信じさせるようになった。」

6) Мистер Гомперс очень сожалеет о том, что случилось, но пострадавшим в этом деле считает *себя* и своих друзей. (В. Г. Короленко)
「ゴンペルス氏はこの出来事を非常に残念に思っていたが、この事件の被害者なのは、自分と自分の友人達だったと思っている。」

7) Советский Союз превратился, точнее превратил *сам себя* во вторую промышленную державу в мире. (Правда)
「ソヴエト連邦は世界で第二の工業国になった — 正確には自分自身を転化した — のである。」

ちなみにこれらの例における себя は、常に主語に立つ対象の全体を指しており、その一部をあらわすことはない。部分をあらわすものが、本来の再帰の意義の弱化であることは、このことによっても裏付けられよう。

ヤンコ・トリニツカヤは、застрелиться と застрелить себя の相違に関するペシコフスキーの所説を引用している[2]。これによれば前者は心理的過程をも含む意図的な自殺行為であるが、後者の場合は多分に偶発的な事実の表現であるという。

このようなニュアンスの相違が生じたとすれば、それは後者が自由な語結合であって、偶々主語のあらわす対象と副次的な変化の担い手が同一であったにすぎない、という事情によるものであろう。

§3　再帰の意義には、前節で述べたように主要な対象の特定の構成部分を示す場合だけでなく、若干の構成部分を指示することが可能な場合がある。たとえば、 потупитъся = потупить голову, взор, глаза, очи, хмуриться = хмуриться брови, лоб, чело などがこれである。

これは再帰の意義が前節の場合に較べて更に弱化したものであると考えられる。即ち本来の再帰の意義が弱化することによって、対象の範囲が若干曖昧なものとなり、広がったと考えられるのである。

§4　この傾向が更に著るしくなれば、これはやがて身体の構成部分に留らず、所有その他、自己の勢力圏を構成する事物をあらわすまでに、その領域を拡大するに至ると考えられる。たとえば стираться = стирать белье, одежду 「自分の下着、着物を洗濯する」、смотаться = смотать свои удочки 「自分の釣糸を釣竿に巻きつける」、заткнуться = заткнуть свою глотку 「自分ののどをふさぐ = 黙る」、укладываться = укладывать свои веши, одежду, книги 「自分のもの、着物、本を荷造りする」、промотаться = промотать свои деньги, наследство 「自分の財産を蕩尽する」などがこれに属する。

これらの例で свой をつけたものの多くはむしろ利害の与格 dativus commodi の себе によって代替する方が、より自然である。たとえば строиться = строить себе дом 「自分のために家を建てる」のような場合である。

これは上掲の諸例にみられる意義の自然な拡張であると思われるが、ここまで来れば

[2]Н. А. Янко-Триницкая, *Возвратные глаголы в современном русском языке,* М. 1962.

-ся の意義は、原義としての対格の意義のみならず、与格に当る意義をも表示することになると考えるべきであろう。

§5　以上述べたことを従来の方式に従って記号によって表わすと、次のようになるであろう[3]。

まず ся が独立している場合には、原基たる動詞は他動詞として機能しており、主要な対象と副次的な対象の同一性は、統辞論的に表示されているにすぎない。すなわち

F1　V(tr.) : $[dS_x, dS_y, K]$

これに対して ся が融合した場合には、その初原的な意義は次のようなものであったと考えられる。

F2　Rf∘V(tr.)=V(ref.) : $[dS_x, dS_y, (y \to x) \cdot K]$

ここで Rf は ся を附加する操作をあらわし、$(y \to x)$ は y を x に置換することをあらわす。すなわちこの段階においては F1 の意義に、$(y \to x)$ という条件が新たに附加的条件の集合 K の中に組み込まれる形でつけ加えられる、と考えるのである。§1 に挙げた諸例は何れもこの段階のものである。従ってこれらの再帰動詞は、原基たる他動詞との対比において使用されることになる。ヤンコ・トリニツカヤのいう「対比的動詞」сопоставимые глаголы である。

§6　§2, §3 に挙げた身体の一部を表示するものは、次のような構造をもつと考えることができる。

F3　V(ref.) : $[dS_x, dS_y, (y \leq x) \cdot K]$

ここで $(y \leq x)$ は、y が x の一部もしくは全体に等しいことを示す。換言すれば $(S_y \subseteq Sx)$ である。明らかなようにこの表示の構造は F2 に較べてより広義であって、F2 を包含するものとなっている (等号を付したのは F2 を含めるためである)。

更に §4 で述べたような、自己の勢力範囲を構成する対象を示す場合は、次のような意義構造を持つと考えられる。

F4　V(ref.) : $[dS_x, dS_y, (y \in D(x) \cdot K)]$

ここで $D(x)$ は、x の勢力圏に属する事物の集合をあらわす。これが F3 を包含するものであることは明らかであろう。

---

[3] I. Yamaguchi, Remarks on the Meaning of Russian Verbs, *Japanese Slavic and East European Studies*, Vol.1, 1980.

II. 相互動詞の意義

§7　再帰の意義に最も近いのは、相互動詞 reciprocalia の意義である。たとえば встретиться = встретить друг друга「互いに遭遇する」、браниться = бранить друг друга「ののしり合う」、обниматься = обнимать друг друга「互いに抱合う」、целоваться = целовать друг друга「口づけし合う」等がこれである。

これらの場合は主語が複数であり、副次的対象もまた、主語によってあらわされる複数の対象そのものである。これが狭義の再帰の意義と異るところは、原基動詞によって形式化される「行為」が、主語のあらわす集合の任意の元と、これと同一の集合に属する他の任意の元との間に交錯してあらわれる点に存する。この意味において相互動詞の意義は、再帰の意義の自然な拡張であると認めて良い。

これを形式化すれば次のようになろう。

$$\text{F5}\quad \mathrm{V(recip.)}:[dS_x, dS_y, (x \rightleftharpoons y)\cdot(x, y \in A)\cdot K]$$
$$(<\mathrm{V(ref.)}:[dS_x, dS_y, (y \to x)\cdot(x, y \in A)\cdot K])$$

すなわち再帰動詞の持つ $(y \to x)$ という条件が、$(x, y \in A)$ という条件の存在の下で $(x \rightleftharpoons y)$ のように双方向性をもつようになり、相互動詞の意義が成立するとみられるのである。

§8　F5 の $(x, y \in A)$ という一般的条件の特殊なものとして $A = \{x, y\}$、すなわち集合が x と y の二つの元のみから成っている場合がある。この場合 A は $x + y$ のようにあらわされるが、多くの場合この為に前置詞 с が用いられる。理論的には接続詞 и も可能なはずであるが、何故かそのような用例は稀である。

たとえば、

8) Как же хотешь ты *со мной* биться? разбе на кулаки? (Гог.) *ССРЛЯ*
「お前はどうして私と戦おうというんだ、こぶしでかい？」

9) В душе его боролись желание забыть теперь о несчастном брате *и* сознание того, что, это будет дурно. (Л. Толст.)
「今彼の心の中では不幸な弟のことを忘れたいという願望と、それがよくないことだという意識とが戦っていた。」

更に x, y がそれぞれ A の部分集合 A_1, A_2 に属しているような場合がある。$x \in A_1$, $y \in A_2$, $A_1 \cup A_2 = A$ のような場合である。たとえば、

10) Австрийские войска в прошлом году были на маневрах именно на тех полях, на которых теперь предстояло сразиться *с* французом. (Л.Толст.) *ССРЛЯ*

「オーストリアの軍隊は、今フランス軍と戦おうとしているまさにこの戦場で作戦演習した。」

III. 中動の意義

§9　再帰の意義の弱化のもう一つの方向として、条件 $(y \to x)$ における方向性の喪失を考えることができる。即ち形態素 ся が基幹動詞と融合することによって、これが本来有していた対格という意識が漸次消失し、ся が単に主語との同一性を示す指標にすぎないと感じられるに至る場合である。

このような場合には、派生原基となる他動詞によってあらわされる「行為」は、主語によって指示される対象それ自身を、状態の変化の唯一の担い手とするものに転化せざるを得ない。即ち中動である。たとえば возвратить「返す」に対する возвратиться「帰る」、открыть「開ける」に対する открыться「開く」のようなのが、その典型的なものである。

従って中動の意義をもつ動詞は、一般に次のような意義構造をもつということができよう。

F6　V(med.) : $[dS_x, dS_y, (x = y) \cdot K]$

この場合 $(x = y)$ であることによって dS_x と dS_y は統合され、容易に dS'_x に転化すると予想される。すなわち「自動詞化」である。

F7　V(itr.) : $[dS'_x, K]$

§10　派生原基となる他動詞のあらわす行為の認定に要する対象 x 及び y が同一のものとされ、しかも置換の方向性が喪われるということの結果として、中動の ся 動詞のあらわす行為は、派生原基たる他動詞のあらわす行為を、主語によって示される対象の内部に「閉ぢこめる」ことになる。これは一方では行為の「心理化」をもたらすと同時に、他方では行為の「内発性」若しくは「自然発生的性格」を強めることになり易いと思われる。радовать「喜ばせる」— радоваться「喜ぶ」、веселить「陽気にさせる」— веселиться「陽気になる」、удивить「びっくりさせる」— удивиться「びっくりする」のような、心理的でかつ不随意な意義をもつ動詞に ся 動詞が多いのはこのためであると思われる。この中には бояться「おそれる」、гордиться「誇りにする」、каяться「後悔する」のように、ся のない形の用いられない、いわゆる reflexiva tantum も含まれている。

§11　以上のような「内発性」及び「自然発生的性格」によって、この種の ся 動詞が主

語に立つ対象の一般的・常習的行為乃至は性癖、若しくは性質をあらわすことも、容易に理解することができる。

常習的行為乃至性癖をあらわすものとしては、たとえば кусать に対する кусаться「咬癖がある」(*cf.* Собака кусается.「この犬は咬癖がある」)、бодать「角で突く」に対する бодаться「角で突く癖がある」(*cf.* Корова бодается.「この牛は角で突く癖がある」)のようなものがある。

性質をあらわすのは、たとえば жеть「焼く、強く刺激する」に対する жеться「強く刺激する性質がある」(*cf.* Крапива жжется.「イラクサはかぶれる」)、гнуть「曲げる」に対する гнуться「曲る性質がある」(*cf.* Стекло не гнутся.「ガラスは曲らない」)のようなものである。

IV. 被動の意義

§12　形態素の ся はその原義が再帰代名詞の対格であるから、論理的には被動の意義をここから直接的には導き出すことができない。しかし被動の意義が再帰の場合と同じく ся の附加という手続きによって形成されるとするならば、被動の意義を生ぜしめる何等かの意義的連続性の存在を想定しなくてはならない。

私見によれば被動の意義に最も近いのは、F6 の中動の意義であるように思われる。即ち中動の場合、条件 $(x = y)$ の存在によって主語によってあらわされる対象は原基たる動詞の「行為」の変化の主要な担い手であると同時に副次的な担い手でもある。しかるに状態の副次的な担い手は、類似した一群の「行為」の中から当該の「行為」を特定する働きを持つから、もし主語のあらわす対象のこの面のみが意識され、状態の変化の担い手であることが欠落するとすれば、被動の意義が成立すると考えられる。

すなわち

$$\text{F6}\quad \text{V(med.)}:[dS_x, dS_y, (x = y)\cdot K]$$

から

$$[dS_x, dS_y, K]$$

を経て

$$\text{F8}\quad \text{V(pass.)}:[dS'_y, K]$$

が成立すると考えるのである。

印欧語において「中動」と「被動」の意義がしばしば同一の形式によってあらわされ、また「被動」の意義が中動の意義よりも相対的に新しいとみられることも、上述の推論の傍証となりうるかも知れない。

もしこの考えが正しいとすれば、被動相はいわば 2 項述語たる他動詞の x と y とを変換したものではなく、1 項述語だということになろう。

V. 前綴動詞 + ся

§13　ある種の前綴動詞は、自動詞であるにもかかわらず ся を伴う。たとえば разбежаться「散り散りに逃げる」、сходиться「集まる」のようなものがこれである。これは自動詞の行為の成立に必要な変化の担い手が複数個必要とされ、これらの変化の担い手の相互関係が問題とされる場合であるといえる。派生原基たる自動詞の意義を $\mathrm{V(itr.)}:[dS_x, K]$ とし、前綴附加の手続きを Prefo、この手続きによって組み込まれる意義を φ とすれば、上述の「離散」をあらわす раз-、「集中」をあらわす с- は少くとも 2 項関係でなければならないから、この種の動詞の意義は、次の形になるであろう[4]。

$$\mathrm{F9}\quad \mathrm{Prefo\circ Rfo\circ V(itr.)}:[dS_x, \varphi(x,y)\cdot(x,y\in A)\cdot(x \rightleftharpoons y)\cdot K]$$

したがってこれは相互動詞の一種と見做すことができる。

以上の外、往復の意義を示す前綴 с- 及び пере- をとるものも、やはりこれに属する動詞である。たとえば списаться「文通をする」、сжиться「共に暮しなれる」、спеваться「合唱のけいこををする」、сработаться「協力して働く」など、あるいは переписаться「文通する」、переговориться 「交渉する、話し合う」、переплетаться「絡み合う」などである。これらの動詞も § 8 で述べたようにしばしば前置詞 с を伴う。

たとえば、

11) Они переговоривались чрез улицу *с* арестованными. (Катаев)
「彼等は通りをへだてて逮捕者達と話し合いをした。」

12) Бюро предлагает связаться *комсомольцами* крупного завода, взять шефство над ними. (Трифон.)
「ビューローは大工場のコムソモール員と結びつき、彼等を指導することを提案した。」

§14　相互的行為をあらわす場合の一つの変形であると従来考えられているものに、相互的な行為の一方だけをあらわすものがある。たとえば кричать「叫ぶ」に対する откликаться「叫び声に応ずる」、звать「呼ぶ」に対する отозваться 「応答する」、писать「手紙を書く」に対する отписаться「書面で返事をする」のようなものである。前綴 от- はこの場合 x から y へという行為の方向を逆転させるのをその意義としているとみられるから、今原基の自動詞の意義を $\mathrm{V(itr.)}:[dS_x, K]$ とすれば、この種の動詞の意義は次のようなものになるのではないかと思われる。

[4]拙稿「動詞前綴の意義の組込みについて」『言語研究』第81号(1982)参照。

F10　PrefoRfoV(itr.):$[dS_x, \varphi(x,y) \cdot (x \rightleftharpoons y) \cdot K] = [dS_y, \varphi(x,y) \cdot K]$

ここで x 項、すなわちこの行為に先立った行為の主体は、明示的には示されていないことになる。

§15　動詞によっては同一の前綴を伴いながら ся をとるものととらないものが並存している場合がある。このような場合、両者の意義を比較すれば、ся を有する動詞の場合には、派生原基たる動詞によって表わされる行為の結果が、主語によって示される対象自身に何等かの影響を及ぼしていることを含意していると言える。この意味で派生原基は一種の他動詞として働いているとみてもよいであろう。たとえば забегать「あちこち走りまわりはじめる」— забегаться「走りまわって疲れる」、заиграть「遊びはじめる」— заиграться「遊び疲れる」、засмотреть「のぞく、窺う」— засмотреться「見とれる、見て我を忘れる」、отбегать「走りやめる」— отбегаться「それ以上走れなくなって走りやめる」、отлежать「ある期間横になる、床擦れを作る」— отлежаться「ある期間横になって気力を回復する」、отвоевать「戦いをやめる」— отвоеваться「戦いをやめて自由になる」、просыпать「ある期間眠る」— просыпаться「眠って目覚める」、проплакать「ある期間泣く」— проплакаться「泣いて気が落ちつく」、упрыгать「跳ねながら遠ざかる」— упрыгаться「跳ねて疲れる」、улежать「ある時間我慢して寝ている」— улежаться「横になるのに馴れる」などである。

以上の比較から ся を伴わない前綴動詞の意義構造を、PrefoV(itr.):$[dS_x, \varphi(x) \cdot K]$ としたとき、ся を伴う場合を次のように考えたい。

F11　RfoPrefoV(itr.) : $[dS_x, dSy, \varphi(x,y) \cdot (x = y) \cdot K]$

このように考えれば、この種の動詞の意義は中動の意義の特殊な場合と見做すことができる。

§16　前節の結果を用いれば、行為を満足するまで遂行することを表わす на- ～ -ся、行為に慣れることをあらわす об- ～ -ся、順応をあらわす под- ～ -ся、行為の過度の遂行をあらわす пере- ～ -ся のような造語形式も、よく説明することができる。たとえば наесться「飽食する」、напитья「十分に飲む」、облетаться「飛ぶことに慣れる」、облежаться「寝慣れる」、подслужиться「おもねる」、подлеститься「おもねる、取入る」、перестараться「努力しすぎる」などである。

いわゆる intensity をあらわすとされる前綴 ся 動詞も、行為が主要な状態の変化の担い手に影響を与えるという意味で、ここに属せしめることができるのではないだろうか。たとえば взахаться「ひどく溜息をつきはじめる」、всплакаться「泣いて訴える」、прислушаться「じっと聞き入る」、раскричаться「怒鳴りつける」、разбушеваться

「大いに荒れ狂いだす」などである。вслушаться 「じっと聞き入る」、вдуматься 「考え込む」のようなものも、これに属するであろう。

これに対してたとえば обсчитаться 「計算をする、計算をごまかす」、описаться 「描写する」、обмериться 「測量する」等に ся が附加されて、обсчитаться 「計算間違いをする」、описатья 「書きあやまる」、обмеритпчся 「測定を誤る」のようになるのは、どうしてであろうか。これらの場合にも、主語によって指示される対象の状態に影響が及ぶと考えてよいのであろうか。この点については残念乍ら未だ確たることは言うことができない。

以上が現段階における ся 動詞の意義構造についての私見である。

РЕЗЮМЕ

О ЛЕКСИКО-СЕМАНТИЧЕСКИХ СТРУКТУРАХ РУССКИХ ВОЗВРАТНЫХ ГЛАГОЛОВ

Возвратные глаголы на *ся* функционально подразделяюся на несколько разрядов: на глаголы собственно возвратные, взаимные, средные и страдательные глаголы.

Имея в виду то, что эти разгряды глаголов составляюця путем прикрепления к копнебым глаголам форманта *ся*, восходящего к винительному падежу возвратного местоимения, автор пытается логически обосновать, каким образом стало возможным этой процедуре вывести все эти специфические категории возвратных глаголов.

В результате исследования оказалось, что постепенно расширилось первоначальное значение винителпчного падежа возвратного местоимения этого форманта, создавая вместе с тем основания для применения этой процедуры к произведению других разрядов возвратных глаглов.